

パルミラ地下墓の遺体に伴われた羊骨 —特に中手骨に関して—

西藤清秀*

I. はじめに

現在までパルミラにおいて数多くの墓が発掘され、特に1960年以前には美術史的な興味による調査が頻繁に実施されていた (Saito 2002)。しかし、これらの墓の調査は、遺体を納めた棺内の調査へはさほどの食指も伸ばされず、また棺内から出土する遺物 (ランプ、ガラス器、装身具等) そのものに僅かに興味が示されただけであった。墓の調査に期待されたのはパルミラ文字解読のための碑文と美術史的興味からの彫像類が中心であったと言っても過言ではない。それゆえ、遺体と遺物の関係を示す図や写真等の記録は、ほとんど残されていないし、当然、遺体や彫像を除いた遺物にかかわる研究も多くない。

上記の状況は1980年、ドイツ隊による墓の谷に所在する36号家屋墓の調査 (Schmidt-Colinet 1992) より方向転換が図られ、まさに考古学的な調査が実施されるようになり、出土人骨の人類学的な調査もおこなわれた。しかし、これ以後日本隊が1990年に東南墓地で調査に入るまでパルミラでの墓の本格的な調査は実施されなかった。

1990年以降、日本隊は東南墓地において地下墓4基 (C・E・F・H号墓)、家屋墓1基 (A号墓)、石蓋木棺墓1基 (G号墓) が調査され、より精緻な考古学的調査が実施され、さらにそれにとまなう人類学的な調査もおこなわれ、従来とは異なった種々の資料が提供された (Higuchi and Izumi ed. 1994, Higuchi and Saito ed. 2001, 西藤 2005) (図1・2)。ここで取り上げる動物骨は、上記の詳細な調査のたまものと言って良い。従来、墓から出土する動物骨は製品としての骨製品や墓へ侵入した小動物の遺体があげられるが、本稿で取り上げる羊骨は、それらとは別の意味を持つ動物骨であり、遺物が遺体の生前での生活に大にかかわっていた一つの証拠品の提示であり、O'Connor (1996: 11) が紹介している Hesse と Wapnish (1985) が述べる遺物として動物骨を眺め、過去の文化の活動に関する情報に相当する絶好の資料である。

II. 墓出土の動物骨

パルミラにおける動物骨の本格的な調査は、今までほとんど実施されていない。日本隊の東南墓地における地下墓の調査においても特別動物骨の調査班が編成されたわけではなく、発掘調査時の偶然の発見である。東南墓地では2ヶ所の墓で動物骨が発見されている。第1は、地下墓であるE号墓の南側室の床面に設けられた乳児土坑墓から動物の頭骨が乳児とともに出土している (西藤 2005: 38)。第2は、H号墓という地下墓の3ヶ所の棺柩から動物の脚にかかわる骨が出土している (西藤 2005: 113)。その後2ヶ所の墓の動物骨は、シリア古物博物館関連総局のムサーブ・アルボツソ氏の同定によってこれらが羊であることが判明し、H号墓出土の脚関連の骨は

* 奈良県立橿原考古学研究所

中手骨と足首骨であった。

A. E号墓 (図1・2・3・4・5)

E号墓は、東南墓地の中ではC号墓の東50mに位置し、門、階段入口を東に向けた地下墓である。この墓は、230年という地下墓では最も新しい建造にあたる。墓室は主室に南北の側室が取り付くT字タイプであるが、遺体を納める棺柩が設けられたのは主室奥壁周辺だけに限られ、両側室には何らの棺柩は存在しなかった。しかし、両側室床面には乳児を埋葬した土坑墓が北側室に1基、南側室に1基存在する。その中で北側室の入口西側壁近くに設けられた土坑墓(NIG-1)は、隅丸の長方形を呈し、長辺90cm、短辺70cm、深さ15cmである。この土坑墓から1歳未満の羊の頭骨が乳児と土製ランプとともに出土した(図6・7・8・9)。この土坑の埋葬は、乳児が頭骨より上方から出土していることから、羊の頭骨を坑内に収めた後で乳児の遺体と土製ランプが土坑に納められていたことになる。この羊の頭骨以外、他の部位、特に体部の骨は認められなかった。しかしながら、この羊の頭骨が埋納された明確な意味については不明である。このように乳児に動物骨が伴う例ははじめてであるが、その状況は従来、詳細な棺内や土坑墓の調査がさほど実施されていなかったことに起因している。

B. H号墓 (図1・2・10・11・12・13・14・15・16)

H号墓は、すでに修復した地下墓のF号墓とC号墓の南、家屋墓192号墓に隣接して位置する。この墓は、南東に入口を向け建造され、階段、前庭部、門、墓室である主室と南北側室からなる。主室北側壁には壁龕(NEX)が設けられている。この墓の全長は階段から主室奥棺柩まで27mであった。この墓の門の軒蛇腹と南側門柱に碑文が刻まれ、紀元後113年にタイボールによって建造され、その後数度にわたって譲渡されている。

墓室は、主室と2カ所の側室が門階段下から直交するように取り付く。墓室の天井部はヴォルターを呈しているが、崩落していた。主室の規模は全長12m、幅3.16mである。墓室床面は地上から約6mのところ設けられ、ほぼ水平である。

北側壁には南面する軟質石灰岩の板材・角材で敷設された壁龕が存在し、入口には未完成の人頭部を表した要石を配したアーチとそれを支える角柱が設けられている。この壁龕はトリクリニウム状に3石棺が配置された空間と石棺下のプラットホームに設けられた5列3段の棺柩(NL)からなる。南側壁には3列、6段の棺柩(SL)が軟質石灰岩材で敷設されている。この棺柩の中央には2点の胸像がはめ込まれていた(図15)。また床面には5基の土坑墓(乳児墓)が存在した。

奥棺室前の北・南側壁に各2列、床面より4段の棺柩が設けられている。奥棺室は軟質石灰岩で4列の棺柩(ML)が設けられ、中央2列2段の棺柩の空間を利用してアーチを持つ半円形を呈した龕状の棺柩が設けられていた。

北側室は、全長4.62m、幅3.3m、高さ2.94m、何らの埋葬施設も設けられていない。しかし入口アーチ裏側の東側壁には井戸が設けられている。南側室は全長1.95m、幅2.04m、高さ2.75mであり、埋葬施設は奥壁4列5段(SML)、西側壁では3列6段(SWL)の棺柩が設けられ、東側壁には1列の棺柩(SEL)が設けられていた(図14)。これらの棺柩のうち西側壁には7体(男性3体、女性4体)の胸像がはめられていたが、中央の2体以外は崩落し、床面上から検出された。また、この側室の床面には6基の土坑墓が設けられていた。

H号墓には83箇所の埋葬施設に少なくとも男性34体、女性33体、若年9体、子供39体、乳児14体、性別不明大人1体、火葬遺体2体の132体の埋葬がおこなわれていた。

出土遺物として彫像以外では骨製女性像、象牙製容器・象牙製紡錘車、象牙製ピン、漆喰容器、ストッコ製人頭、青銅製鏡・容器・ベル・腕輪・耳飾・指輪、ガラス製容器・玉、貝、ランプ、土器等があるが、女性遺体に伴って出土した化粧関連の遺物が特徴的である。

H号墓に埋葬された132体の遺体の内、2体に羊の中手骨が伴われていた。2体は、それぞれ異なった棺柩に葬られた遺体であり、1体は主室北側壁の北壁龕の下部に設けられた棺柩の1箇所NL5-0から出土した(図16・17・18)。その棺には頭位を北に向けた子供が葬られていた。この棺には青銅製化粧容器、青銅製装身具、ガラス玉ネックレス、ガラス製容器、青銅製ベル等が副葬されていた。この棺には2点の羊の左前足中手骨が出土している(図19左)。1点(全長11.2cm)は左腕付近、もう1点(全長12.0cm)は右腰付近で大きさは僅かに異なる。左腕から出土した中手骨は山羊の可能性も考えられる。この棺の遺体は、未成年であるが共伴する副葬品と遺体の性別の組合せから考える(西藤2004)と少女と考えられる。

さらに主室南側壁の棺柩SL1からも羊の右前足中手骨2本(1点全長13.4cm、他の1点全長11.4cm)出土している(図19右・20)。この棺柩には子供、若年少女、成人男性、熟年男性、熟年女性などが埋葬されていた。2本の中手骨は棺柩両側壁に沿ってそれぞれ近接するように出土した。しかしSL1とSL2の間の棺柩壁が崩れ、両棺柩の遺物が混在している可能性があるため、中手骨がどの遺体に伴うかは断定できなかったが、副葬品と遺体の性別の組合せから考える(西藤2004-b)と熟年女性もしくは若年女性に伴っていた可能性が考えられる。

また、SL1-1から羊の足首の間接骨が出土している。この骨に関しては何らの加工も認められないが、動物骨というより、骨製品と考えるのが妥当のように思える。なぜなら新石器時代よりサイコロとして使用されている部位だからである。

以上がパルミラの墓から遺体に伴って出土した動物骨である。おそらく、遺体にもなう動物骨はこれだけではなく、詳細な調査が実施されればかなり増加すると考えられる。

Ⅲ. 動物骨の役割

遺体に伴う動物骨は、骨・角製の製品を除いて見てみるとその意味を解することは困難である。それらの骨の出土状況やその骨の部位の種類、また共伴する遺物の種類によって何らかの推測を図ることは可能かもしれないが、それらに明白な意味を持たせることは難しい。

今回取り上げる動物骨は、羊の頭骨と中手骨である。頭骨については上記のようにその意味は明白ではなく、推測の域を出ない。つまり、羊の頭骨を伴っていた乳児の年齢は、1才未満であり、生前にその乳児と共に葬られた羊とに何らかの関係が存在したとは考えられない。しかしながら、乳児の家族が乳児と羊に何らかの因果関係を求めたにちがいない。現在まで数多くの乳児墓が発掘されている。そのうち精緻な調査で検出された乳児墓は25基あまりあるが、羊の頭骨を伴った墓はE号墓の1基にすぎない。その意味でこの頭骨は特別なものと考えられる。死後世界への随伴者的な存在として捉えることができるかもしれない。

羊の中手骨は、H号墓の2箇所の棺柩から出土した。中手骨は1体の羊から4本存在し、足を構成する中心的な骨であるが、今回出土した中手骨は4本とも前足である。中手骨は、羊を含めて一般的に最も堅固な部位である。H号墓から出土した中手骨はそれぞれ2本出土していることから、2本が同時に使用されたと考えられる。従来、パルミラの墓においてこの種の骨には注意が払われず、出土しているのかどうかという情報もないために

考古学的な見地からの使用に関する資料は皆無である。今回、これらの骨と共伴する遺物は、装身具、化粧容器、ガラス容器など女性にかかわる遺物であることが明らかであった（西藤 2004-b）ことや、男性遺体にはランプ以外にほとんど遺物が副葬されない（西藤 2004-a）ことから、出土した中手骨もまた女性に大いにかかわる遺物であると思われる。しかしながら、この中手骨が何に使用されたものかは不明であった。羊の中手骨の部位は、蹄を含めて全く不要な個所であり、羊解体時にも真っ先にこの4本の中手骨の部位が切り落とされ、捨てられる。この部位には肉は無く、食されることはないため、特別に何らかの目的がこの部位にない限り、通常見向きされることはない。それゆえ、この部位が棺柩に納められていたことは、特別な意味がこの骨に託されていることを意味している。

この中手骨に関して何らの根拠も調査では見出されないなか、パルミラの人々に民族学的な聞き取りを実施した。その際、現パルミラ遊牧民（ベドウィン）の子供達の中には“投げて遊ぶ”という答えが返ってきた。またパルミラの市民の中から、40年前に母が機を織っている際に中手骨を機織の中で見たという証言があった。この発言は、出土した骨の意味を考えるのには有力であった。しかし、中手骨が機織のどの部位にどのように使用されていたのか、明確な話は聞けなかった。だが、それがわざわざ女性と考えられる遺体に伴われていたことを考えると機織にかかわる何かと考える方が妥当のような気がしていた。

このように中手骨に関してもその用途について推測の域を出ない状態であったが、アレppoの城周辺に設けられたスーク（市場）において土産用布地を実演している場を目のあたりにした時に、驚くべき状況を観察することができた。それは、布地を織る織機に中手骨が、機を上下させる箆の両端に張られた紐のよじれの中に噛まされていたからであった（図21）。この織機には1対の羊の中手骨が使用され、店の主人曰く、40年以上は使用されているとのことである。彼曰く、紐の振れの際に大きな力が加わり、木では容易に破損するために中手骨が使われているとのことであった。これはまさに中手骨の特性が活かされ、パルミラのH号墓から出土した中手骨に合い通じる。遺体の中には紡錘車等の織物にかかわる道具も伴っていることを考えると、H号墓から出土した中手骨は織機の重要な構成物として推測することができる。これはあくまで現在観察し得る中手骨の使用法の一例であり、他に異なった用途があるかもしれない。しかしながら、骨自体の特性を十分に理解した織機での使用は、中手骨の使用法を過去まで遡らせるに十分な証拠と言える。

H号墓の羊の中手骨は、織機の重要な部位として役割を担われていたことが推測できた。この中手骨は堅固なためにその機能の寿命は非常に長く、親から子へと継承される可能性も十分考えられる。しかし今回出土した4点の中手骨には明瞭な紐の擦れた痕跡は確認できず、さらに中手骨は非常に堅固で、僅かな期間の使用ではその痕跡を見出せるほどの磨耗を見つけることは困難のように思える。それゆえ、これらの中手骨は、日々たずさわっていた生業の一部を携えたか、もしくは機織を女性の象徴として考え、生前、その生業に係わりが無くても、織機の一部を遺体に伴わせたということも考えられる。

IV. ま と め

パルミラの墓に葬られた遺体に動物骨が共伴している例が認められ、その動物骨がどのような用途を持ち、意味を含んでいるのか検討してきた。近年、生活跡における動物骨の調査は常識化しているが、墓での動物骨にはさほど注意されずにいた。今回の羊の中手骨は、パルミラの葬制を考える上で大きな役割を持つものと思われる。

このような中で H 号墓の NL と SL の遺体を葬った棺柩から検出された中手骨は、織機を構成する一部位の可能性が、現在も使用される織機の観察から推測された。これまでの調査研究の中で、遺物を伴った遺体は女性の可能性が高いことから、この中手骨は女性に伴われたと考えられる。このことは、パルミラにおける女性の労働の役割や遺体とそれに伴う副葬品のあり方に重要な考察をもたらせることになった。

つまり女性に伴われた中手骨は、パルミラにおいて女性が織物に携っていた可能性を明らかにし、その作業が女性にとって重要な位置を占めていたことも物語っている。パルミラの地下墓では性別を問わず、基本的に死者と共に副葬品を納める習慣はない (Saito 2005)。副葬品を納める場合、特に装身具と身の回り品を中心にほぼ女性に限られている。しかしそれもすべての女性というわけではない。つまり特定の若い女性のみが副葬品を伴わせる傾向にある。このような状況から織機の一部の中手骨が身の回り品として女性に伴われた意味は、今後の女性遺体に伴う遺物や生前の職掌を考える上で重要である。

また、本稿で何の変哲もない羊の中手骨が、パルミラの女性や葬制を考える上で大きな意味を有することを指摘できたことは、樋口隆康 (奈良県立橿原考古学研究所所長) 奈良・パルミラ遺跡発掘調査団長をはじめとして、団員各位のご協力・ご教示の賜物である。羊骨の同定に関してはシリア古物博物館関連総局のムサーブ・アルボソ氏のお世話になった。また、資料として提示した図・写真については佐々木玉季氏の手を煩わせた。最後に本稿はアレppoに所在する世界乾燥農業研究センターの折田魏朗先生を抜きにしては生まれなかったことを記しておきたい。

参考文献

- Hesse, B. and Wapnish, P.
1985 Animal Bone Archaeology. Washington, D.C.: Taraxacum.
- Higuchi, Takayasu and Izumi T.(ed.)
1994 『Tombs A and C Southeast Necropolis Palmyra Syria – Surveyed in 1990–92』 Research Center for Silk Roadology. Nara.
- Higuchi, Takayasu and Saito, K.(ed.)
2001 『Tomb F-Tomb of BWLH and BWRP- Southeast Necropolis Palmyra, Syria Publication of Research Center for Silk Roadology Vol.2』 Research Center for Silk Roadology. Nara.
- O'Connor T.P.
1996 『A critical overview of archaeological animals bone studies』 『World Archaeology』 Vol.28 No.1 pp.5–19
- Saito, Kiyohide
2005 『Palmyrene Burial Practices from Funerary Goods』 Cussini, Eleonora(ed.) 『Journey to Palmyra』 Collected Essays to Remember Delbert R. Hillers 150–165. Brill. Leiden.
- 西藤清秀
2004-a 「パルミラの墓に見るランプと死者について」 『三笠宮崇仁殿下米寿記念論集』 363–380 東方学会
2004-b 「パルミラにおける女性の埋葬」 『第11回ヘレニズム—イスラーム考古学研究』 pp.15–19 金沢大学
- 西藤清秀 (編)
2005 『パルミラにおける葬制とその社会的背景に関わる総合的研究』 平成13年～16年度科学研究費補助金基盤研究 (A) 研究成果報告書
- Schmidt-Colinet, Andeas (hrsg.)
1992 Dass Tempelgrab Nr.36 in Palmyra, Studien zur Palmyrenischen Grabarchitektur und ihrer Ausstattung, Damaszner Forschungen Band 4. Verlag Philipp Von Zabern, Mainz.

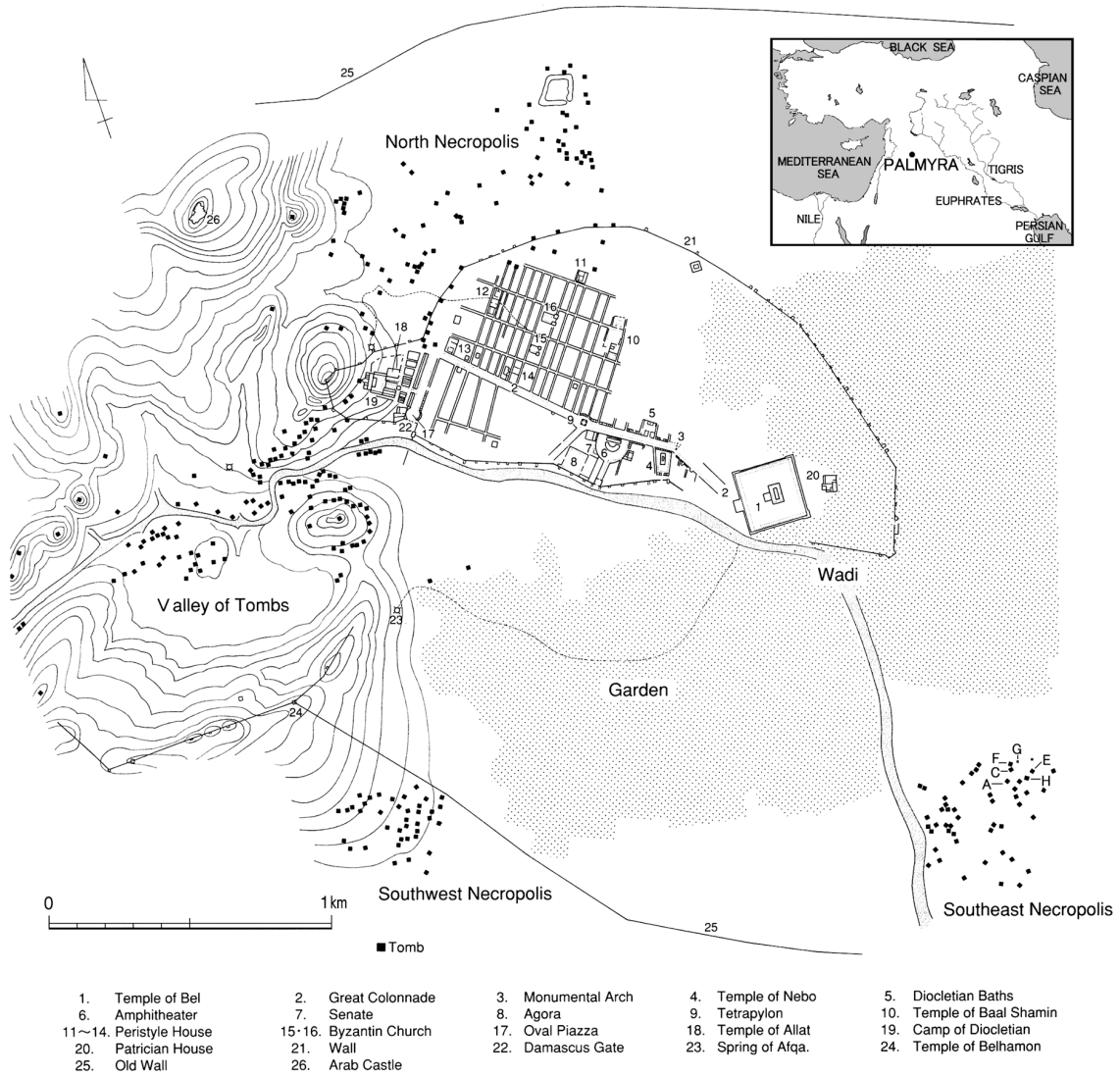


図1. パルミラ遺跡位置図

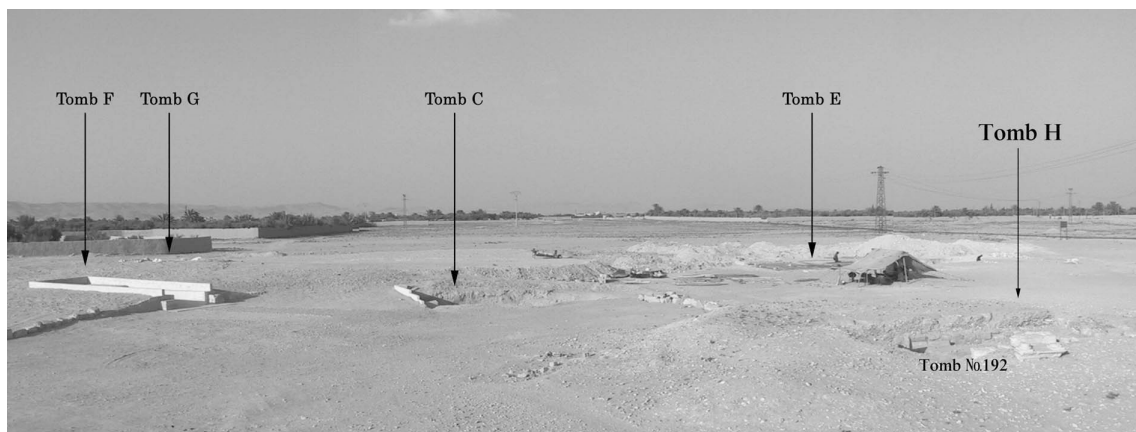


図2. 東南墓地 発掘調査地区

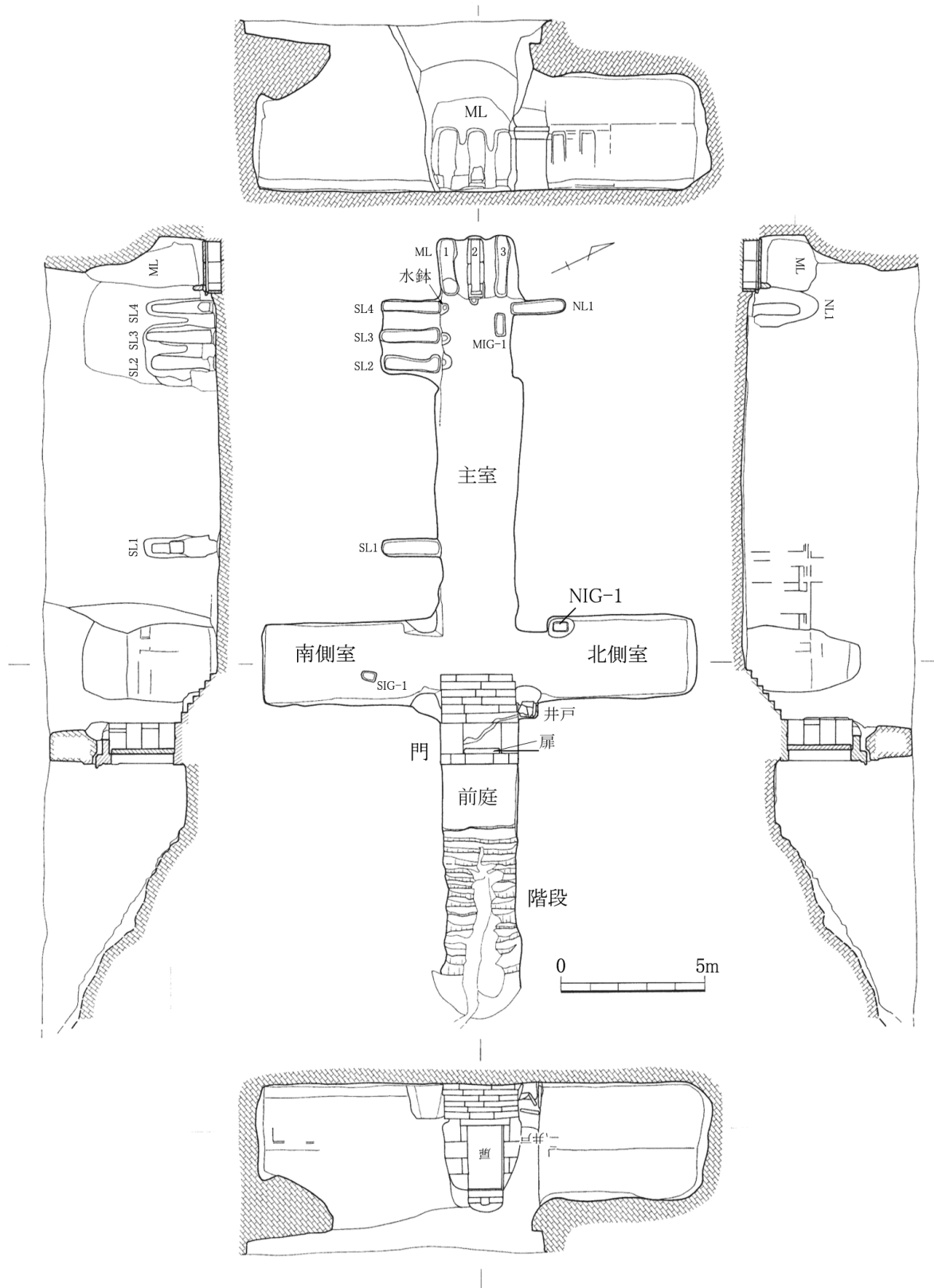


図3. E号墓 平面・立面図

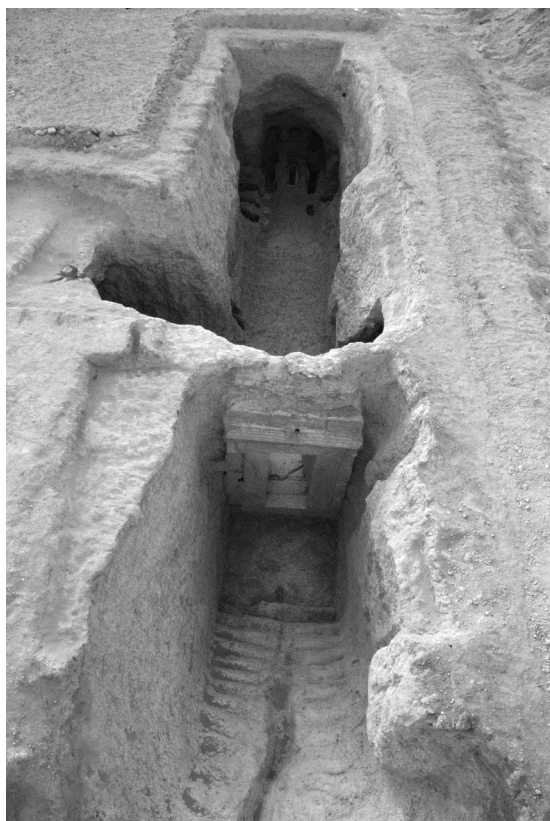


图4. E号墓全景

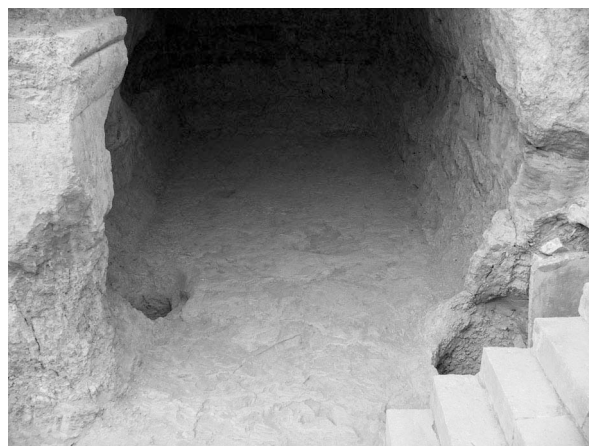


图5. E号墓北侧室



图6. E号墓乳幼児墓 NIG-1 盖检出状况

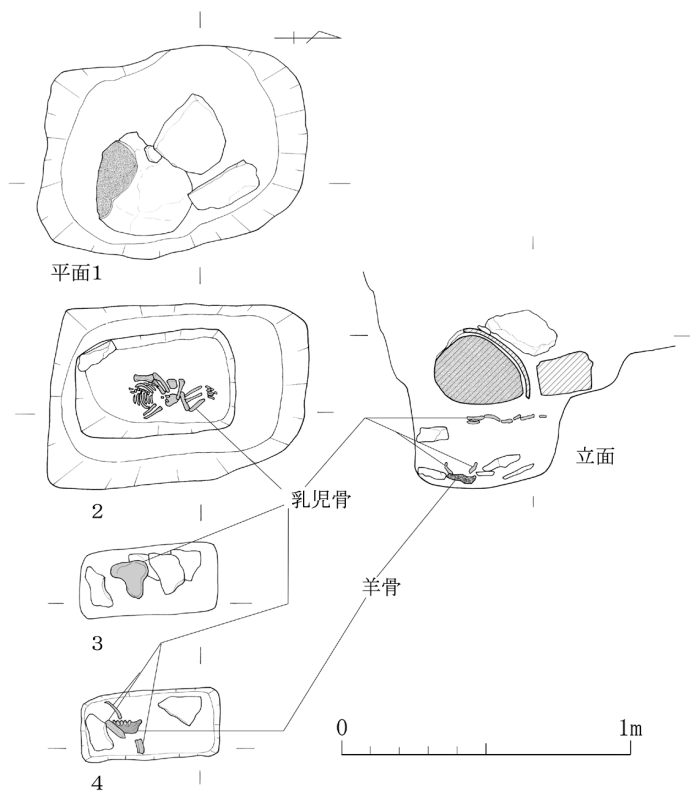


图9. NIG-1 出土状况图



图7. NIG-1 乳児骨出土状况



图8. NIG-1 羊骨出土状况

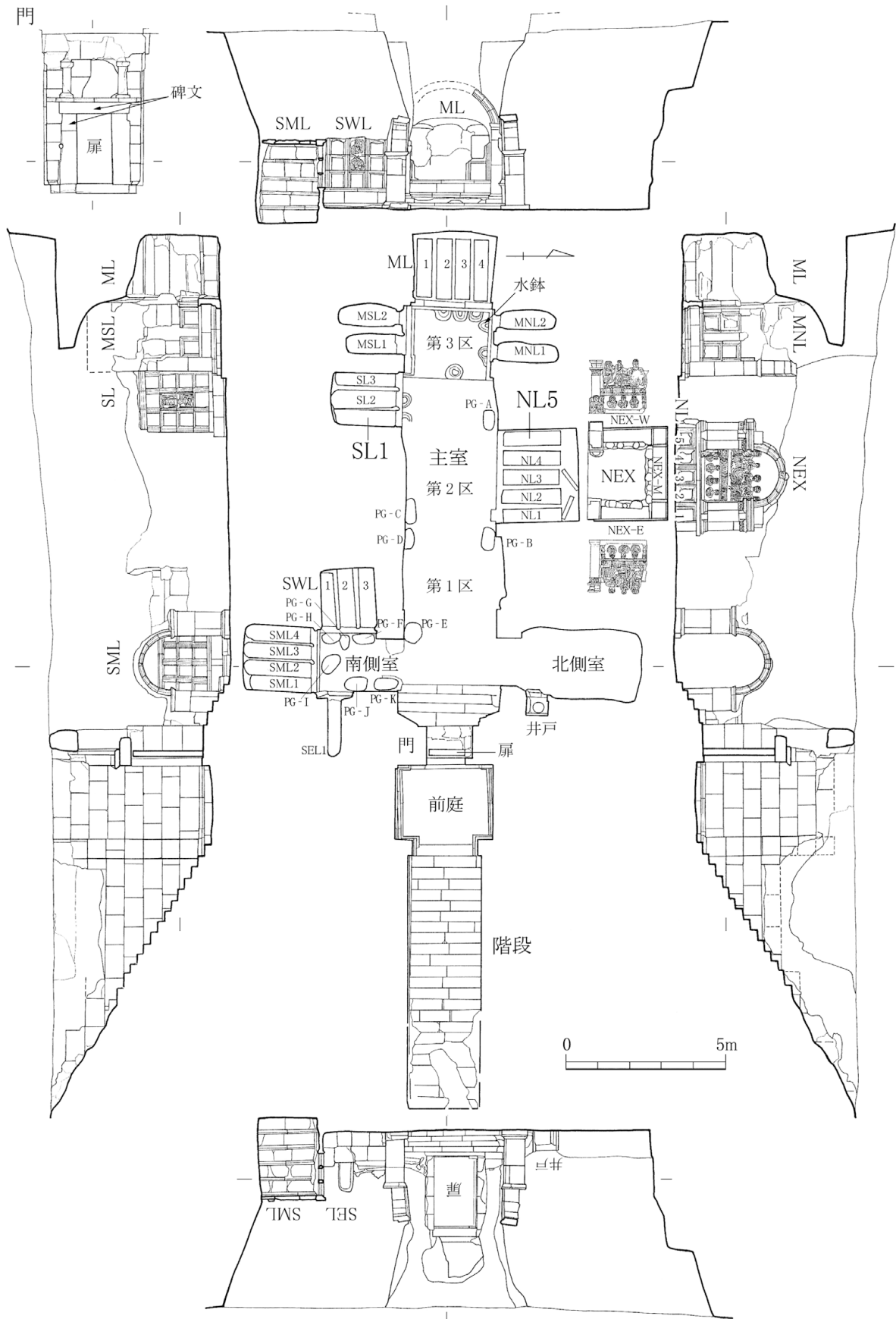


図10. H号墓 平面・立面図



図11. H号墓 全景



図12. 主室 (入り口より奥を望む)



図13. 主室 (奥より入り口を望む)



図14. 南側室



図15. 南棺棚 SL



図16. 北壁龕 NEX と北棺棚 NL



図17. NL5-0 出土状況

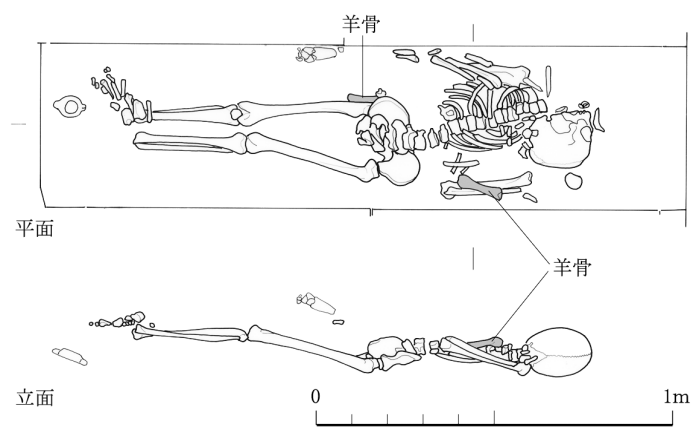


図18. NL5-0 出土状況 平面・立面図



図19. NL5-0 出土 羊中手骨

SL1 出土 羊中手骨

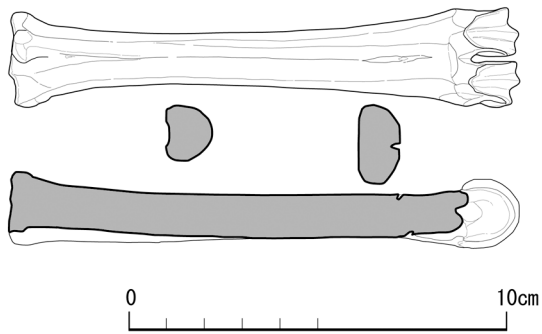


図20. SL1 出土 羊中手骨実測図

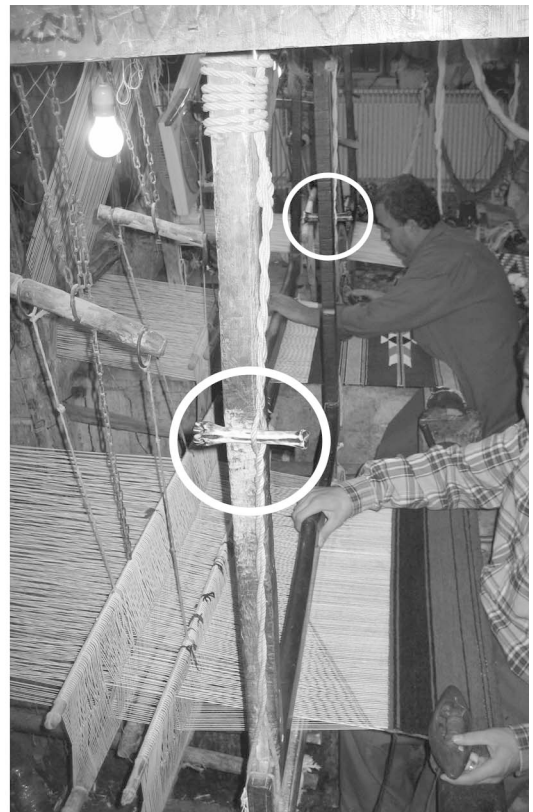


図21. シリア・アレppoの街中のスーク（市場）で見た機織の風景